

『吾輩は猫である』番茶

Junko Higasa 2016.7.16

第三章。「番茶」は英語で何というか、と生徒に尋ねられた教師が「savage tea」と答える話が出てくるが、これは倫敦留学で大英帝国文明に触れた漱石の、西洋コンプレックスの裏返しだろう。

顔にあばたの残る漱石は、倫敦で行き交う人々の肌の色、身長、社会マナーなどを通して、自国と西洋の差を痛感した。留学時代のノートには、西洋人は日本人の中身を知らないから、外見上で西洋人から馬鹿にされるのも尤もだという内容の断片がある。その文明差の特徴の一つが、生活に深く根差した「紅茶」であったろう。イギリスには食事時間の間隔の関係でアフタヌーン・ティーという習慣があり、漱石も下宿で「お茶に呼ばれる」という経験をしている。そのように紅茶を味わった漱石は、帰国後も朝食には、砂糖を付けて火鉢で焼いたシュガートーストやジャムを塗ったパンを食べ、紅茶を飲んだ。西洋帰りの漱石は、『猫』において、西洋と日本の文明差を「お茶」で表したのである。いわば紅茶は文明人の象徴であって、番茶は未開人(savage)の象徴ということである。その比喻を更にひねってみると、金田の手下が、苦沙弥を「savage tea」と揶揄するのは、西洋を知らない人間が西洋人の表面を気取って、西洋習慣を身に着けた苦沙弥という日本人の中身を知らずに、あばたの外見で判断するという風刺になる。似非西洋化の恐ろしさがここにはある。